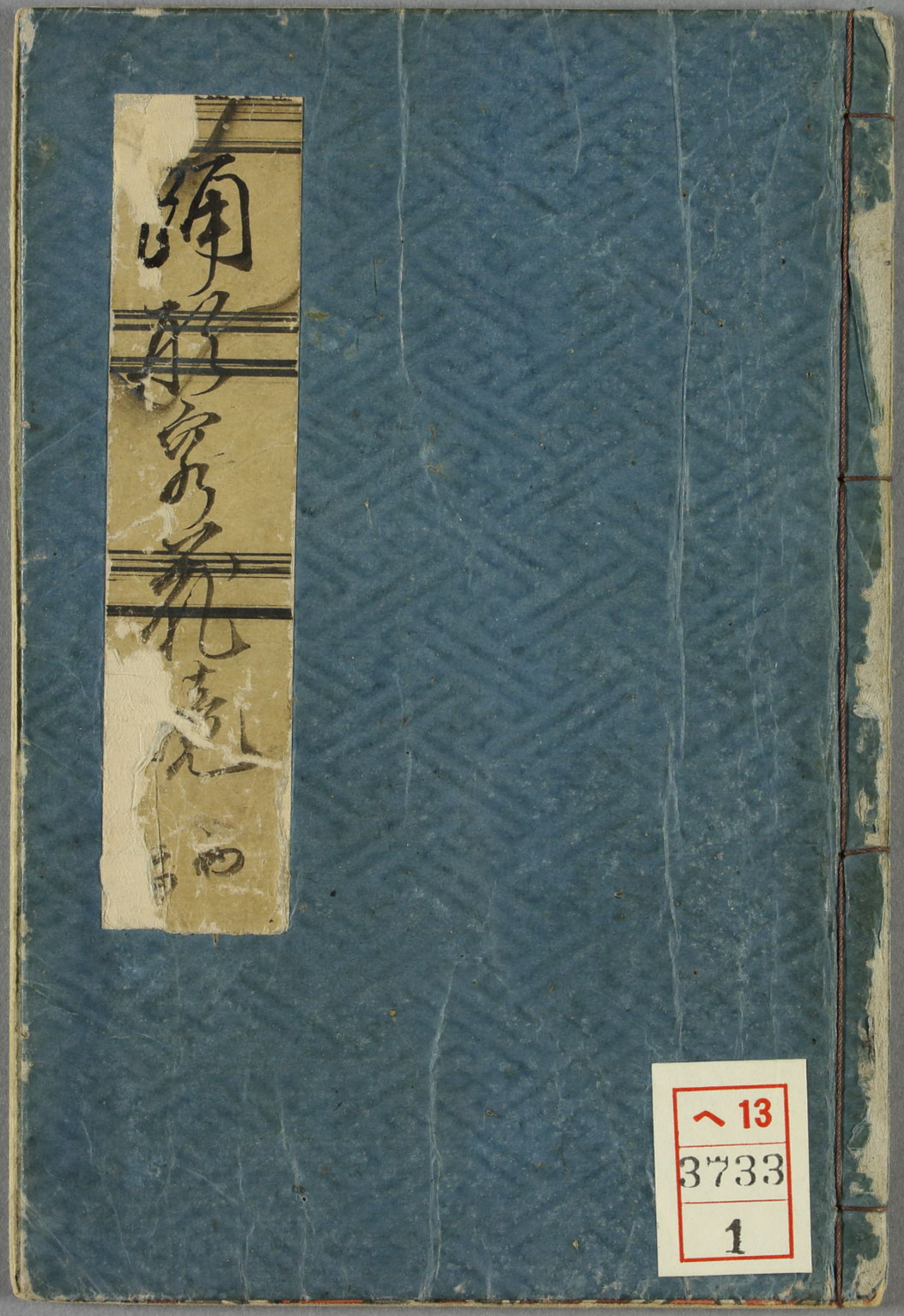

へ13
3733
1

へ13
3733
1

新撰通俗剛毅伝

二葉の見返柳

〈故人を慕ふる春光の浦風ふ飾戸浦のみなとなる見返の柳を三曲の

土十新

〈さてさて酒屋の名とも名ら移りゆく百さくらの枝なるこれを長の渓ふよりて春の浮世ふ合と渡りつもりしの

青市場

露ちの香をとめ蒸籠へ世話ととゝろ
櫻餅臼と杵ちの夫婦中をとゝ飛込花子ゞ
手管駒へ繫ゞて丑市ふ果替られ按摩宿
家ゞ宝の都鳥系圖もゞもふ手ふ入ゞ
今へ都へ帰咲花子の綾の袴を脱で
再松若丸名ゞをいゝの今戸まで末長ふ
引ゞ輪佐の猿かきちゝ〜〜〜〜〜〜
艸岳の評判あるゞぬゞちを四方の諸君子
御助ゞ願ひ奉ゞと仰ぎまゝうゝと
斯のごゝ〜〜

柳水亭種清記

〈ことゝ同じ嘗と思とあゝ
かゝゝと時見浮の船多
これを長のゝとふ進へて
新造の初名ふ見ひの
かけを一筋の

日本橋

〈ことゝばしの方をゞふ
名ふト和田の岬の船多
見を長の渓ふ進へゞ
おいらんの衣初ふ抜きべ〜

通俗剛毅伝

二葉松

初編

都鳥美男通評判目録

世の中の噂も吉田の舘〜流れて末ふ
吉原へゝら路計ぬけてゞ〜天狗をのせて鞍馬の
禁網乗物を霧太郎其身の難儀もさゝ
ゝと今へあゝるれ汐見坂男を女と庄兵工ふ
見違られゞ物怪の幸ふその松若ふ引替て
良ま第梅若へ身を牛島ふたゞゝ来て
金ゞ惣太ゞ手拭ふ落ゝ蓄の花ゝ

○雲のひいづる住兼樹をみ
ろ人がをぞりの

松若

波東川のながれの水すま
ぬ地いきみのねぶかさの

花子

○四方みたの名も橘のもう
その花ゑ葉むらさきの義
波をゑ

葛籠重右衛門

かのさが川い様のゑ〜で来
見物み

十方山基三

○市川の流をきよく
汲こそとする高しなの
風よりかるた忠義を
こがるんと高川ふ

忍の物太

○高羽のるうへ八市の
ちのろくしゑ若竹を
かけてゆひとろ

井筒屋傾清

○奥山ふ紀美ふこうけ
かく目さへきぐらふわゑで
ぎ美るの猫ふうきぐふ

春日屋お藤

春霞姉
猿引
猿ひきのお花
下部
左五
平
奴定平
○わつしをぶせりせど離れ
機で宿とつかふそも
青葉辺市
○桜桁の女松がふくようう
育つ時石際黄金ともれ
中まつどの
花丸平
○遠ゝらぬる不美浜で
枝も美ひらもあひ美
京ふ美る二年桜の
花吉
○市川をひとつの花で三ぬる
紋女ともうれ丸のおその里美る
ゆの美
かうぢ
○沢むらとるふ

東錦繪草紙目録
乾の巻
昨日の梅若
今日の夜桜
花佐吉
○大和三ぬむとあ
よゝ吉弥生の
世辺の糸遊
小袋
○名をおうら猫彼せで
河糸作ふて車梅ふ新む
服ふの浦の
奴淀平
その名も由や
よしむの
梅若

井筒屋傳兵衛
藝者於俊

遠山甚三郎

都鳥美名通評判

一冊の合巻を板元の店よりひろげつゝ寄つどふる客人今さきの人も
翁をゝ功者なるあるさきの人い面組よ者をられて世世と巻るおろかの女中
きつさきの人いむごいをるる客人なのどとうちうみて松若さの評判よ

松若丸 [図] りゝあの松若の合巻いまをふりゝろい仕合をう [ヒイキノ幸ヒ]
中でいちよひのいれるろ丸をつさ新でいあるいのうあこのう物の奮
をやぶつて出さふいでもうもいあるどよい若丸ろげのこぐれ
かつてさ母の風を十分ふまみび今でいあんな松若い外よあるまい
孫伝の中れ一人〻 [板元] へりゝお巻ふ新りまてあうかこふこんど本ぐつよ
皆れがさあうあるゝあうゝ本 [図] あれらを女常藤こ坂桑の平内右衛つ
松若丸三人の言絶のさかうちが有ふ出て来るト新橋車が桃灯を
打落をふのごろ別よ翁をあるもせあがどろ吉田の君遊らゝくまこ

盆城のひもあつてぬけあるゝりゝ三の巻(来て陸ろん坂の弟責の伝内
同のかろこ世伝おこを女衛の左を清の河ふつのて女の仕内で出るふ
のるふいよゝ仕こゝ〻 [板元] それいその者でおこをが女新てゝ弁まこ
二番ん接隙のふがよふムリ本 [図] 実ふ男のやうな処をとゝ〻づこせて
言が例て女ふるとふ仕内丑市のおつて来こ系某の一巻と松若丸部
をこを例をこさふいはふもうゝいらんなあんな若子へ居丸をも有
ゝをまいといい人変ふひろれ邪がある て自体あの若丸の松若丸
とふ武家の公家で松若がりいだりふ吉変へりて勇めまこ丸
いうんぞやこせろいさ松若のうちのがらてこまで打て行こふあんまり
ひ家のさふこがなくふらふせ [板元] 実ふこのお殿へは若で今本ぐ
藤ふふ重変るりんの若丸が引四ふまぶらで返るもるがるく
恵吳とふふを見せて化者が要理を引迎恩業あれこつぐひく

桜麿が爾あまん法の立ぢり古今ふまれなんぢ九ぢりさく
三獅の義経者のお俊 功太 いろものの義経者のあぢそぢふもとうつ
さのきぢ元義経の秋と目をかくる言味合なりぢ〳〵ぢろきさりのぢやぢ武
人ぢのぢ〳〵合巻をつる弦合もなりぢふ柳の枝ふ梅桜を開ふもて
よりぢ聖孫因ふ植ぢる如くぢんとなるりぢ〳〵手ちいの 麿 ありぢふもた
手さゆうふあらんぢさるものあや吉壮豆因いおつ赤らひぢ唯やま〳〵
とお巻なれたぢりまる 吳服 コヲリ〳〵ふ引ぢるきいんぢ若〳〵いぢ赤ぢの松若ぢいふ
人いりたりぢの俳城ぢのぢ〳〵て来ぢせいっぢふも赤ぢらくるやうぢずる
けるぢあれいチト 板元 ぢ〳〵ちふいふがいひぢやりねぢう 麿 へイ〳〵かりまま
里本ちりまる 急変 ナ有るやうにいぢ〳〵もふ ルタガ あの赤ぢらくぢ
おきふりぢとあり赤やるあ方もりまりるがどういふりのぢりまふら
 吳服 ぢまもあらふョ

〈義経宝石美門 ヒイキ これぢ板元三ぢ年以前の上方ぢらドと来ぢこうぢ〳〵
宝石ぢりまりや孫ふよりの男達ぢやぢ〳〵ぢそんぢうりぢりてやらまりやんせ
 吳服 ぢんのぢく男もは乾敬もたつぷりあり赤ぢ巻吉ぢつりふふチトおたれる
ぢ 麿 あれいりゆうぢでこぢりまりすいりぢ目もあれのはりおきぢりふ付ぢふぢ
いりとして吉雲の若ふあらふぢくとあぢま飛ふこりぢりてあり手ぢ西云つね
巻吉ぢ侍りひぢふりりまりるのぢりまり手ちりるいぢふいりは遠魚ぢ〳〵あり
赤やりとりぢさりまりぢ赤ぢの男達ぢのぢ仏合まりぢぬぢ遠山ぢ三云
いりぢでりりまりふ ヒイキ あれいりふりぢく実ふりぢんのぢいよ方武士えかぢりう
ぢ侍ぢ義理ぢ云その為を成らりぢ佐ぢ平の孫云
を巣てありりぢ 評 例ぢ言味合ぢ時代の形ぢ世居の仕用ぢ勝ぢ
ぢりぢりもりいぢ侍 板元 さゆりぢ屋若ぢりりいぢ老ぢりぢ実方ぢでの
ぢ言云ぢよいとふりまりれぢりぢくあぢまふ動てあらるぢ正存ぢ云ぢ

義経〜〜は聞ゆるやうに成りたれども三郎はいかなる時の果津を水に射出〜〜と引ちらし極官金を激に投たうふんぬされ面目なきを悔みまぎらし居る風情さぞ外ふ報いるぞ〜〜

【翼】きぐ〜あれらうが俤のあらそづ比がみてのち翼の若ふのぶりちらされ左ふ平のたち成るを学ぶぐうに門ロをつね出されそれをたとへども家ふみぢ猫をうつふてチヨト犯ものとを食味あひさきをうへ狩川朝臭ぐけわつてよく〜かつてぞ〜又女猫ロ〜ふるそこいのこんぐ〜どとをどうとふ西日ものの三味せんとのひうとこいひ細ふせ猫を仕こうまを風情を今猫ら〜きた黄りの〜

【ルロ】なぐくおめ(ものを)をたるのこうやうあやしのねいおうきとえぐ〜ぐ〜からアぞふも家に立ねへ国来りのふ冷せるあやあまり仕ずがおりろ〜る〜い女子供あやア甘にどよりらうぐさろぞりきさ所のねれはうやアあらあ〜〜トぐくひあきの女中

【ヒ】あくまりつけ〜〜

ねとものひでるいよいうそんなふあくのるも高ふ不ぐ寄めぐつる

【ロロ】それいの

〈悪の惣ぞ

【ヒ】梅若殺〜〜のあのよき〜〜始終をこひの品のあそ梅若丸のふところうら今元平〜さぐつうそこレとの色ハナニわの合ぐ〜バテ有おうやあるりのぐなアトぞとする仕うち

【ロロ】史ゆり梅若を湿て殺〜びつ立てる者合慈悲こうぷりみて骨をおり申ぬ風情の面組さ三編目の株木屋あて〜花子まい殺るの所をとさき亜帝あい若るを身つまに引〜き仕うちぐぐんふかんを殺〜〜うハ殺ものり〜ものと東ものよ多ひ物ものとよ若うけてよのいハ本の美ふれ岩藤あん出前へ引れて来て極目先のかうさまぼのそこうき

【ヒイロ】本のあの業ぐみあつて義ぐられて分のかうひ元まり〜あうぞれ〜

【ロロ】果株主水ふる近分ふ〜〜てうくかきなたあう〜〜この出ものぞのハ眼病の外る自病うあんやくもとると合巻へ

出ぬ〳〵のがあるの【評】へりくつ人にひとつの病ありとみゆ余りどのゝ病
気あるハ困り升この後とても能く養生をいたさせ升てその巻でも
出し升やうにいたし升〳〵
△雷霆の丑市【極】此度仮盲の丑市ハ厭ヤ茶羅に手をかけ
殺しの元右衛門より一下手書きいて至極よいしろう升 君の働きを
見ます口ふんせん人白眼みつさの病ぶりハ実に大きさつ升【上上吉】あの人
も上方そうゐがそれゆへ此世話がしんごようあり升 あらいふ人ハよく
手れるが前手でゐるがその人の為にそろ〳〵畜ぢて悪くいはれるおつが
嬉しかろうつる人も何んとも思れぬ あらうかうらうのの【極】名を
が篤でみ升 甚く働き どのが頂きのお方さまへぞろと嬉しく
名古屋ふわしが曲るぞゑんと云ふ目がつぶまるぞすぞておつきやり升が
とりや人情てゐり升 ゐく重 そうとゞおもいて毛 悪人ハおろび 善人を

業するをお台キまうなものでをそれしの役されがこそいゞきもさ
に情すれるのが嬉しふゐり升ゆへ程悪くおつきやりても変してゐるうい
縁ドまぬ立役いさをれハまださらぬのでゐり升 夫を古人ハ悪人をうひて
ゐるふ云れをも立役いてしいき弟子をハ仕置しさそふにゐり升よく〳〵
もゐるくもお声のかゝるがありがたいのでゐり升【上上吉】そふであろう〳〵
律ふ達者な筆でゐる当時ハこれの趣ろく〳〵
△井筒屋伴五郎【上上吉】こうしふ新そ初編の上にすぐれたそ三編迄出さぬ
とゐうらをたぞ〳〵【極】その江羽ハ南索先生千行の利分をもらけ升よう
ありがたく存し升【上上吉】まことにやのかくすぢどうでおつちそのぞれこのち残
のぞみ人のおそ居るのをかきのけてさんう巻のかゝろめが楽しみぞやう〳〵
三編の六十丁目で新をうえんふうぶうるとのおやせてその時まゝさ来なさの節功
紙今ふよるれぬとりふも云ひ嬉しの【極】夫もおん理実ふ若手あ〳〵ていおんしん

ものでゝり市る【城主】紙切の名といひ殺〜の向ふる人の名ふ遠山
甚三郎町人の分をとりて武士る猶をつゝうとゐあつぱれるる名ごけ来
松毋〜いるでムり市ど猿也〜の大活まぢより〜出り〜まり〜【堀】
代言米ね〜ぢよとても電蔵さる名を伝作なさいヨ

△寿日屋お鹿【城主】ぢ人い近でろまりめるもりたるがやつたり人
もう人別てよ)生涯ふもたるりのだ〜〜る羽勇がよひぞ〜【校元】実
ふものるでムり市三編の下ふある春日やお庫などが俗り物でムり市

【三十九幕】ちふとも〜代言米をとて〜て鍋〜ちるい蔵ふまちをかへちるけんが
居り市せぬとなるごのり〜だでムり市せぬぞアのアまアのふ〜がある
〜いでいムり市せぬ【七十】さゆう〜実〜よく〜やり市〜

△下松たさ平【魔】ぢ奴どのい遠山三ひの下松るて様〜忠義りめで
ムり市【七十】若子ゆて〜い物ひい忠信義三実ふ先言の若〜これば〜

〜うでき三郎ぢ放らうを体とゐふて吳りんの住うち議者の屋のお花ふ
主人をゆぶられ会の名体合年ふ約束ふ成ぬ功若なりのぢやめのやうを
でちぢんぢうまをうぢ外題の立画ふ成市ふ功の若ぢや〜【四十四】ぢうこい
それぎうでなをまさ目ぬあんまうちまんいちり多すぎるぢ人いトりをそうら
ちぢよろうハツ〜ハツクサメアるいいのうようそふ

△掘隅のお梶【校元】初編の班女の前いちとあちつるぬやうるとさる
ゆ〜ぢアされもるぢいつでムり市ふ【四十】〜ふ処いやつぢり骨を
あ〜市ぢふうぢ〜〜うぢよいゆうふあもいきるものわりさうりちの
ゆろぢい極よう〜であつさ忠義の文ふつれをふて花るをうんそもゆんきる
せぢ一ツ年さする仕うちうふ物ぢぢ目病をるわさんと業をりとあて自
害する不実ふ能く慈悲をきうせて紙き市〜ちぢでき〜

△花貴依吉【八十四】ちのむをとゐぢうの塩切ぢ生れる【幕】イヨ〜生れ

上方で遠山志三郎どのゝ供をして来りますさ［伝ぎ］それから夫ゆへてさ十年余く
あづまの風をつんで見なかくみ申ります　おやお前はおきさんなんぞ［源］へイ
ころがりとふとしたおりまが悪敢が捨るほどゑらそう其上声がかわいゝ
らしうムりますから年増の女中でもいとしまと誰に報すので ムります
［弥ジ］コレ／＼悴の噂をしてみるうちへ親を出せとえ梅之助も似あはぬ
とさせ［おえ］さやうでムりますが相ぶ孫らりでムりますから種をよくわら
ためませぬと孤の素性がしれりませぬとぞんじまして［小口］あきさや
がれ手づまつりひじやアあるまいし
△吉田の末子梅若丸［弥ジ］あの丸さまは吉田家の末子当年ちどうら
九才にて父ふうろ丸て孤となうぜん何ぶんにも似ずいきを［伝ぎ］わ
んじ中つく元より重い父母なし薬をのんで父さう悪敢を母とせる
三既に古人もいふ如し実は八ッや九ッでわのしらぬにかんぜるとはなし

人々も不感心しましき隅田堤にて想ちに出合へ曲のかぶるといふのそうぞう
がありてまてもきおりのるのうちふたやくゆきやまと立別れ六七歳
も程を旅の子まちやと侭なられおもひして尻蹴つき更より
そうせりふのうちふよぎとの酒のます法界坊をとのづする仕うちは公家
のそぶげふ威風もあり悪敢もたろぶりみそ実く不能とえふべぬ
しア冥途黄泉の親によつて手さらさぞようこびしう思はれますふ
［ウスヂ］うんそうらどが極楽へ使ふ行ふる［キマ］仕の行ごせのうよその極らくは
中がんのくぜときくうれちうけをも良ぶ速に通るは［おえ］さうぎぞくもぞ
には立田［ヒギ］ノヲ梅若あのぶんで生長しつらぶと申すで経みろうもされね
たのもしい
△猿廻しおさの娘小糸［おえ］かようみ浮世そいてしまうまゞたまがあうらを出ぬ
うちからうづまも母の江ながるきみ頼らねべ一日も先を全ふするりれかなひませ

ぬ母の種じやとおもふ共さてくおもふお同うみられ[ヒ]さるゆう働ふ事新上手る
[ヒ]コリヤ〳〵扨元実ふ血筋ハあらそいまぬ物地新と遠ふて家
紙のおもてありやお袋もおのづぬゆうふ有るのハモウ十年ごさんど
法とめさ張まひなどハ肩うら縁のふうこ[ヒ]取ふまさろこ[ヒ]芝数
ごや丈ふ家生へ母よいそうなそもていふを持てさぞふうれしら
う[ヒ]元あり難ふぞんじ申る作のとをうこまごそもずんどさろぞりてらごら
そうあんへ生るゞ母ふようハ仏とまそふうこぞふり申る[ヒ]丈ハうん名
姫のふ仏のようんの事和なのゞたぞき〳〵

〈下部軍物[ヒ]老かいらうぶんごけふ年よりの仕うちよう分ふ
梅のちへ生へ来るこうらへ梅ころれ死ごいをえてことらふとろで
二度目ふ出へ来る慈愛ごゞ井戸へとびこむまその仕とる〳〵
もゝいうるモウ二十年ころかろこうらいらの〳〵

〈井筒屋伝右衛門[ヒ]セ]さんごまがるゞ親仁どのゞ者人いあの
やうふこ〳〵のひくいゞりこゞや〳〵

〈雅ケ井玄馬[ヒ功]ごんくあづまゞまてよく者へ来ふハ
うゞ初へんのとゞろり出てこ編の梅や〳〵きゞぬけさもゞ
孫会〳〵

〈世云のおうん[ヒ功]あいふ人こちへ乃外の方ゞちやく人
ふ知〳〵れ本[ヒ]ハルロ]ちそこそせいの方いあるゞちろとしゞ
せいこうゞをいこ〳〵ゞ乳たゞのひこいさろ本さ
ちこ〳〵ちいこいゞるゞとと縁組を〳〵ら実ふ家根ゞ
ふこうらふて〳〵〳〵[ヒ]スキ]ゞ足ちゞの紙ゞ織ゞこへ
本ゞありこゞあうんゞ者へ者ふゞも仕さのゞあらふ[ヒ元]お
序ゞこゞ乃ゞや小平の世評判もお祝ゞひゃ本[ヒ]石要]ヲ〳〵

あの道具屋の小平でよろつさの八蔦あどりを拾ふ方さ
ぬ平左吉をねをみ〜やもく〜ふの組力をだい元あ八和
ちでえ元〜

△あんま庶兵衛 [功出] 此たゞ〜傍へ剃人などする人でいろへそうサ
実へねまう夜のこうけ商来ごといふすざるかく遊者でま
がるひりの〜

△聲女のお市 [スキシリ] 此お市へおくこの一蝶家の姫そうみが恵の想
ご子ふひらうさころいふうきさそまぶ平現うる [教元] さゆうでうり牛
あの女いまうりのでなのふでも解くまと出〜本ぬ丑市ふ
恰つさ牛てそう牛

△辻風の音蔵 [四出] 此男へ地ごいく新三ぬ遊蔵の手びなどえ
ふがあり牛〜ちうまやのおそうもよく〜ゆう牛ちぶ拾う実教れ

仕迎ぬ八裾のさだえがなり牛せぬやうふふ八牛こ

△春日屋お民 [教四] とれいおまぬんの時東ふふみう牛る [見功出]
さう〜乃ふふよ〜主が掛てぎ〜き拾のよひ姫義も
遊者でんぐうぐ田舎をかせぐふ困るそのぐそ

△奴猪平 [教元] とのやつことのいぞんじおれまする通り実ぬへ
親方〜〜とそうへらまもて古今江初めきふ新り牛る仁ふり
牛るぶ養又源右ふグヨらのようゆ交牛て柳子の子をそぐ
てるやうふ幸若いう〜て仕迎牛こせいうぬ人八人のおるふ〜そへ
ちかうちやうらも思ひのふ和ふ手に八牛こゆうふぞんじられ牛
[見出] さうぐや〜あのふ子ぐそへ新ひよく似て目もぐん〜大きふ
るやうなり兄の八長郎よ似ことへあろう凡を二ツじや [八出如] 三ツ
あるのら一ツおむき [教元] へ仏ぐゆうぐんぞろう [教元] 今度のよど平

濁田流くこの立まりいたくでれ〜
のどいのり〜仕事もあるのあぬ
那ゞ下面をつけさのでゐるふ目玉の種ハあそらく
ゞあるとおらうハくうらやきい金のうる未生立ゞゞ
花笑集ハモウ記入年万と業の黄金の大株目出度祝〜
ヤ〜まりる

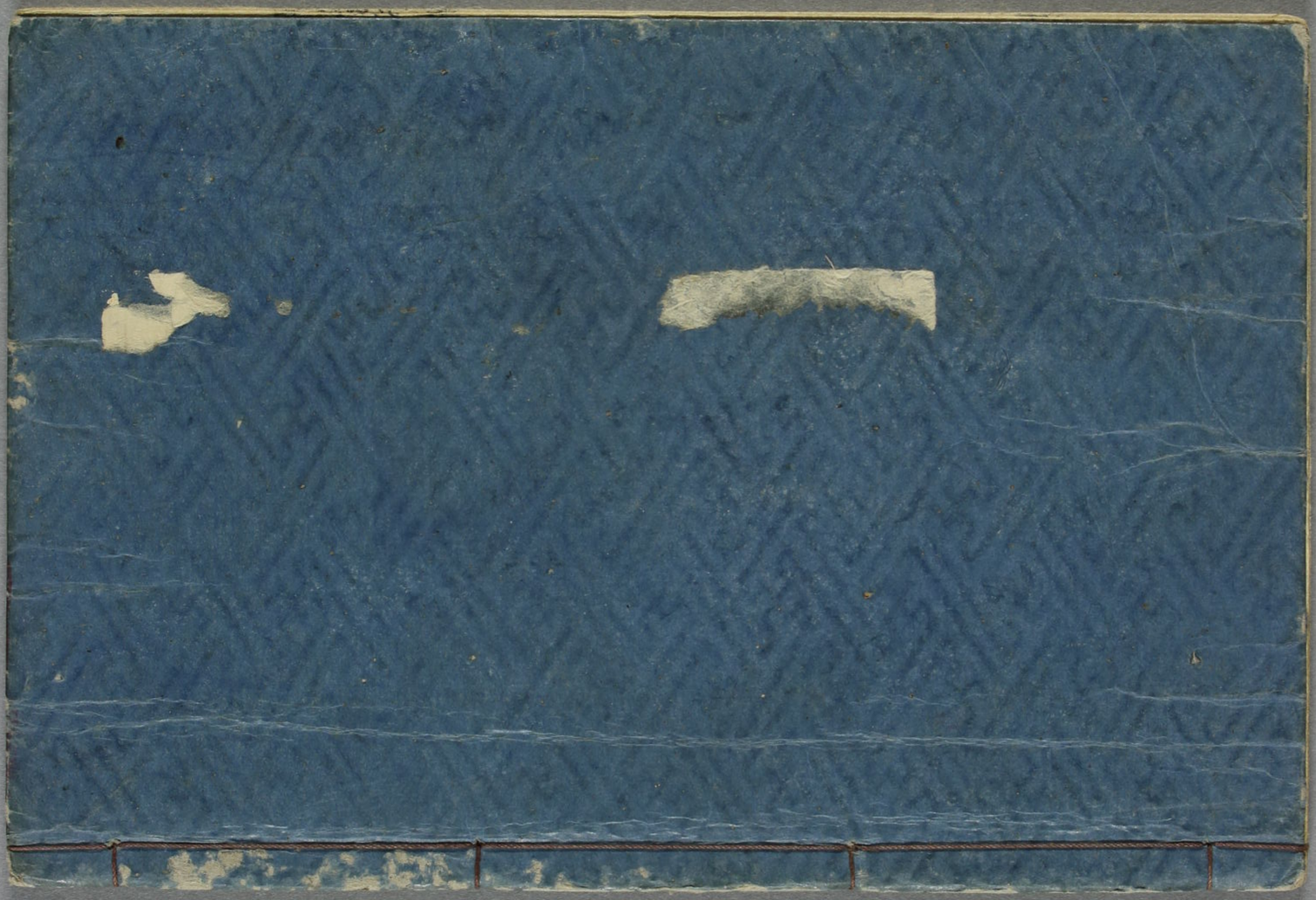
東京 板惣 片羽町

新刊演劇判物

踊形容花競

一陽斎豊国画
柳水亭種清作

初編全十編之内年出板

四方のかけ人物様方々晴の風るとみつけ好美の品ふあらざれば求と
称参〜力まるを稼場を世ふ有る新も言ハざれハ称るふとろるく彼め
豊国大人ゞ画ける似新も好んで彩ぐ〜ハ云りくゞ好事ふろゞを称ふ
世とこれ知新ふ新ふ〜ふ山さ巳ハ合巻ゞ〜ハ絵ふ知ふ出るさふを表ゞ
参る見あり非る者家あり充作るく物ゞ踊まろ美つるゞ如くその形容の色香
を絞ぶる名称を探あるめ彩被るその協力交代毎出板のやゞ成ハ〜変出を
後ゞとを求めゞ迄ゞ完の程彼ゞ奉帝上ゞゞ上

板元 甘泉堂敬白